

関東学院 学院史資料室 ニュース・レター

No.7
2005.10

目次

学院史資料室写真集 6	1
関東学院野庭幼稚園のあゆみ	2
資料・情報提供のお願い	8
学院史資料の紹介	9
編集後記	10



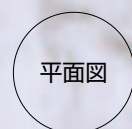
学院史資料室写真集 6 関東学院野庭幼稚園 1976(昭和51)年 2月

1969(昭和44)年9月、横浜市住宅供給公社野庭団地の造成がはじまった。^①

関東学院野庭幼稚園はこの野庭団地内に、1976(昭和51)年開園した。写真は開園を目前に控えた園舎である。

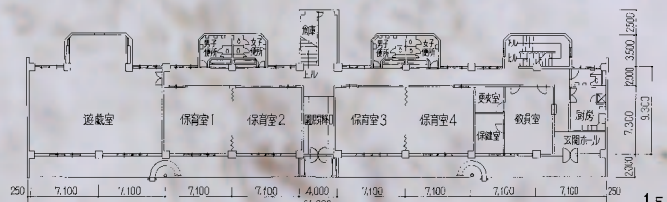
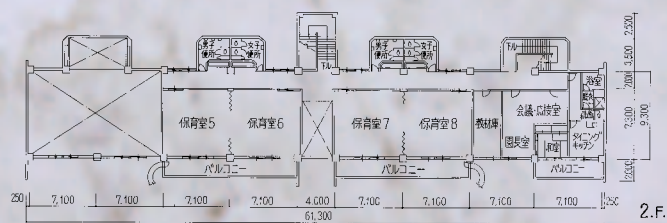
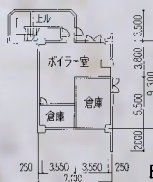
鉄筋コンクリート造 2階建一部地下1階の平面図は右のとおりである。

1975(昭和50)年9月23日定礎、1976(昭和51)年3月24日竣工した。



床面積

B1	95,280㎡
1F	692,490㎡
2F	510,280㎡
計	1,298,050㎡



① 横浜市港南区野庭町、面積96ha。1969(昭和44)年10月、横浜市の行政区の再編成により、港南区が発足する。〔「港南の歴史」参照〕

関東学院野庭幼稚園のあゆみ



野庭幼稚園の草創期のこと (1976年～1984年)

佐々木昭子

開園までのいきさつ

1974(昭和49)年横浜市港南区野庭町に大規模の造成が行われこの種の団地としてはモデルと誇るような大ニュータウン野庭団地が生まれ、その中に幼稚園敷地が三か所予定された。沢山の応募の中から学院がその中の一カ所を取得することが出来、学院内に本園建築のための野庭委員会が発足した(委員長林淳三)。その会の一員であった私が創立園の主事としての責任を受けて、ためらいつつも開園までの日々を六浦幼稚園の業務をしながら祈りつつ新園の準備を進めた日が忘れられない。委員の方々と建築中の新園舎を見学の日、ヘルメットをかぶって園舎内を巡回し「ここが新しい園なのだ」と身の引き締まる思いであった。野庭委員会が発足して2年余、紆余曲折を経ながらも関係理事他、多くの関係者の尽力によって着々と歩を進めて遂に立派な園舎が完成した(鉄筋コンクリート造二階建一部地下一階1,298,050平方メートル)。園庭も広々としている。

他園では1975(昭和50)年11月に入園願書受付を終えていたが、本園は工事の関係で願書受付は年

を越して2月、未だ園舎が未完成だったので、臨時に地下の倉庫であいにくの大雨の中で行ったがこの日を待っていて下さった方々が大勢来られた。「面接は住宅供給公社でいたします。指定の日時にいらして下さい。」と丁寧に対応したのは4月から本園に就任する短大幼児教育科の学生たちで、「ずっとジュウタクキョウキュウコウシャを繰り返していたので舌が回らなくなりました」と苦笑したことが忘れられない。2月28日は1日中かかって新園長(下平千太郎)と共に親子面接を終了した。こうして開園の準備が進んでいった。

いよいよ1976(昭和51)年3月31日献堂・開園式を迎えることが出来感謝であった。献堂・開園式には学院理事長、学院関係者、建設会社、六浦幼稚園の先生方、近隣の幼稚園の園長先生たちそして六浦小学校児童の合唱、トランペット鼓隊の特別出演もあって厳粛な中にもなごやかな門出であった。

第1回入園式・1年目を歩みだす

園児募集は遅れたが1年目の入園式(1976(昭和51)年4月12日)には153名の幼児が与えられた。

年中組(4才児)4クラス、年長組(5才児)1クラスの編成である(定員240名)。初代園長下平千太郎、主事佐々木昭子(六浦幼稚園より転勤)、教諭5名(全員関東学院女子短期大学幼児教育科



第一回入園記念

1976(昭和51)年4月12日

井上祥子	石井寿美	中谷みどり	根津美英子	木下典子
	佐々木昭子 主事	加藤亮三 理事長		下平千太郎 園長

※後方の5名は教諭。
入園式直後の写真のため、職員 高石淑子は写っていない。



備品の木枠を利用して

1976(昭和51)年



臼井農園でのおいもほり

1977(昭和52)年11月2日

卒)、事務職員1名のスタッフでスタートした。「人になれ 奉仕せよ」の建学の精神、そして募集要項に掲げた本園の教育方針「キリスト教精神に基づく自由な雰囲気の中で幼児ひとりひとりがいきいきと活動している幼稚園、友達との触れ合い、教師たちとの触れ合いを大切に、こころの豊かな保育をする幼稚園を目指しています」がたてまえだけのものではなく真に実行されるために新しい教師集団は文字通りひとつになって開園第1頁の歩みを始めた。入園式以来、3学期卒業式までの毎日は何もかも新しい場での経験で一同無我夢中であった。また実際に園舎を使用してみていると不具合があったり、一雨降ると水はけが悪く園庭がぬかってしまったりと困難なことが次々と生じて、その度に本部(法人)に連絡して改善して頂き何とか切り抜けられた。地理的に本部(法人)から離れていると心細いことも多く六浦から転勤した身には新園を担っていく重責をひしひしと感じたことであった。

新教諭5名(内3名は新卒)と共に始まった保育は日々戸惑いも多かったが、幼児たちの生活も次第に慣れて来た。嬉々として活動している幼児たちの笑顔に励まされ、毎朝祈りをもって新しい勇気を与えられつつ歩んだ日々であった。保護者の方々の協力も大きい支えであった。無事1学期が終わり、お泊まり保育を園舎で行うことができた時の感動はひとしおであった。主な行事の遠足、運動会、感謝祭礼拝、クリスマスも楽しく実施できた。

1977(昭和52)年3月23日第1回卒業式を行い、32名の卒業生を送り出すことができた。この3月で初代下平園長は退任された。創立1年目のご苦労に心から感謝申し上げた。

新園の草創期(1977~1984年度)

4月から下田哲(女子短大教授兼務)が2代目の園長として就任した。

高層マンションの林立する団地では他地域では考えられない人口密度で、特に若年層の入居が多く、それに伴い幼児の数も急激な増加で、1977(昭和52)年以降入園希望者が多く応募者全員を如何とも収容しきれない状態であった。募集時の早朝からの行列、1日ばかりで大勢の幼児・保護者の面接、徹夜の査定、発表と、異常な緊張の連続であった。時には折角の希望に答えられぬ心労を味わい続けた(園長宅まで抗議の電話があったことも)。しかし、2年程で人口増加のピークも落ち着き、また、保護者の側で幼稚園を選択して応募する傾向になって来た。

定員240名の2割増288名という年度が2年間続いてまさに満杯の賑やかさであったが、その後は一般的な幼児減少の波で次第に減って来て、1983年度は遂に4才児1クラス減という状態になったので、前々から要望があり、準備を進めて来た3才児保育を始めることができた。

近年、団地外遠隔地域から次第に応募者が増え、また、学院卒業生が本園のことを知って子供を入園させるケースも多くなって来た。本園の存在が年々地域社会に認められ評価されて来たことは喜びであり励みである。また、本園卒業生が第1回から、関東学院六浦小学校、関東学院小学校に希望者が進学している。

地域の中での関東学院野庭幼稚園

前述のとおり開園早々、園児数の急増とその対応、時代の趨勢により次第に幼児が減少して近接

している団地内の3園にとって、また、区内幼稚園にとって互いに共存するにはどうあるべきか将来の見通しを考えることが重要な課題となってきた。初めての区内幼稚園園長会では戸惑うことも多かったが、次第にお互いを知り、協調していくことの大切さを学んだ。教師たちも区内幼稚園の研修会には進んで参加し学ぶ機会をもった。

また、キリスト教保育連盟、バプテスト連盟の保育部研修等、可能な限り参加して積極的に学び協力する姿勢で励んできた。

目指す保育・広がる夢

時代が変わり、施設が変わり、そこで働く人が変わっても、変わらないもの否変えてはならないものがあることは私たちが先達から学び、教えられている大切な真理である。保育の世界では特に教師の人間性が問われることを思い謙虚にさせられ歩んできた。今まで長年の保育経験の集大成として実践していきたい夢が大きく広がってきたのは園生活がやや落ち着いてきたころである。

1) 幼児たちに聖書のお話を通して主イエスの愛、力をしっかり伝えたい。

この願いは開園の日から毎日の礼拝で幼児にわかるよう根気よく続けられている。

幼児たちと共に元気よく主を賛美する日々でありたい。

2) 園生活の中で充分自然に触れ、自然のすばらしさを体験させたい。

幸いこの団地の近隣には、昔からの農家があったので早速連絡を取り交渉し、親しくなって折々幼児たちを連れて散歩させて頂き、畑を見たり、筍の成長に驚いたり、秋にはさつまいも掘りを実施でき大喜びであった。また、園庭

に柿の木を植えて、四季を通して観察、収穫してみんなで感謝して食べたのはいい思い出となった。

3) 友達と思いきり遊ぶ園生活でありたい。

泣いたり笑ったり、ぶつかったり——その日々の中で、譲り合うこと、我慢すること、そして集団生活のルールがわかってくる。

4) 文庫を開設し幼児たちが良い絵本に触れ本の大好きな子どもに成長してほしい。

小さくても心のもった文庫のある環境を願って学び、見学し、夢をふくらませてきたが新園生活2学期に、2階の一部のスペースに本棚とこども用ベンチを置いて「ひかり文庫」と名づけてスタートした。この文庫活動は予想以上に園児、母親たちに喜ばれ成長していき、1982(昭和57)年度園長の賛同を得て会議室を改造し、独自の部屋となった。

主事として野庭幼稚園草創期、園長、教職員たちと共に精一杯歩んできたが1985(昭和60)年3月をもって女子短大幼児教育科(附属幼稚園主事兼務)へ転勤を命ぜられた。草創期を共に労してきた仲間との別れは辛かったがバトンタッチした後輩たちが立派に幼稚園成熟期を担ってくださっている。ますますの充実ご発展をお祈り申し上げます。

2005年8月

佐々木昭子 (ささきあきこ)

1957(昭和32)年から1993(平成5)年3月まで関東学院に奉職。

1957(昭和32)年から1976(昭和51)年3月まで関東学院幼稚園。

1976(昭和51)年4月から1985(昭和60)年3月まで関東学院野庭幼稚園主事。

1985(昭和60)年4月から1993(平成5)年3月まで、関東学院女子短期大学幼児教育科専任講師、同附属幼稚園主事。



野庭幼稚園のあゆみ (1978年~2001年)

杉山美智子

はじめに

野庭幼稚園の草創期は、佐々木昭子元主事が記されたところだが少し述べたい。

関東学院としては全く新たな環境での幼児教育

が始まった。単独の地で現在のように天谷バス停も、地下鉄(上永谷駅)も無く、手前のバス停から、毎朝園迄走ったものだ。並木は植えられた苗木ばかりの状態、緑も無く真新しい土地に10階建の団地が並んでいた。その若木と共に園も育ち、幼な子の成長を今日まで尊い働きとして見守り続けて来られたのである。

この地に建てられた学院の使命を覚え、どんな時にも先生仲間と祈り合い、情熱をもって保育に



みんなでパン作り

1990(平成2)年2月



静岡の日本ランドで雪あそび

1991(平成3)年1月

当った。何よりも根底に流れるキリスト教教育を土台とし、“幼なき日に創り主を”の幼児教育に携わることの喜びと夢を保育の中で実現していった。真に感謝な日々であった。

時代の変遷と保育

〈1980年代〉

今も昔も子育ての原点は変わらないが、移り行く時代の中で、何が子どもにとって大切か！自分たちの保育を見詰めなおすことに取り組んだ。型どおりのカリキュラムにはめ込むのではなく、幼児が生き生き生活できる保育を探り求め、主体性を尊重した保育への転換期となった。教師主導の管理的な保育から、研修、研鑽を重ね当時の先生仲間は、苦労も厭わず実践していった。試行錯誤の日々は続くが実り多いものであった。

1984(昭和59)年、次第に幼児減少の波と共に地域の状況も厳しくなった。港南区のみで幼稚園は23、他に保育園や大きな自主グループ保育等も含め、園児獲得合戦の波が押し寄せて来た。園長会に於ても熾烈な争いがあり驚くばかりであった。「親にとって都合の良いこと」「何かを教える(習い事等)」「未就園児(2才児)の獲得」と言った考えは益々広まり強烈になっていった。

当時の新聞に“幼稚園での教育が揺れている”と記され、「園児減少にともない塾化(英語、漢字、書道、茶道、スイミング、楽器演奏、体操、そろばん、パソコン)、日替りメニューのような多彩さで歯止め知らずの傾向強まる。」とあった。全くその通りで、集団生活の中で育つもの、子ども本来の姿、発達段階に応じた育てより、発表会や運動会では出来ばえ、見栄えが求められ親も喜んでいる傾向が周りでも濃くなって来た。

しかし、我々は揺らくことなく保育に専念し、自分たちの保育を打ち立て、幼児教育の原点を見失うことなく頑張った。お茶の水女子大学附属幼稚園やその他の園をみんなで見学し、研修を重ねていった。しかし、この時期故の激しい混迷期の煽りを受けずにはいられなかった。

園児数168名と減少、対策をつきつけられ、その1つとして、スクールバスの送迎を実施する件が出されたが、今後の経営に向け検討した結果実施されなかった。

1985(昭和60)年3月、卒業期を迎えた多忙なある日、突然、佐々木主事の異動を大島良雄園長から聞かされた。草創期から熱心に上に立って、まとめ、働いて下さった佐々木主事が女子短大と附属幼稚園へ行かれる、皆で驚き、茫然となった。これからどうなるのか。まさかの事柄に驚きと動揺は隠しきれず、責任の重さに耐えかねていたが、大島園長は、「やってみなければ解らない。最初からできないと言うことは言えない。」と諭された。その後の歩みを支え、力づけられる言葉となった。

1985(昭和60)年4月、5代目、村上顕園長を迎えた。主事としてのスタートを先生仲間は総力を挙げて助けてくれ感謝と責任の重さでいっぱい思いだった。音楽感性訓練が園長の計らいで始まり希望者が受けた。音楽性を高め感性を豊かに育むことを大切に保育し、この頃やっと念願のピアノが全クラスに入り喜びだった。

1986(昭和61)年の関東学院クリスマスには園児全員が出演した。夕方、親子、保育者の会場までの大移動を思い出す。

〈1990年代〉

幼稚園教育要領改訂が進められ、六領域から五領域へ。理解のため互いに学び合い、改訂の視点

はどこにあるのか、教師の資質や能力が益々問われる時であった。この頃、210名前後の園児達を預り、改めて若い先生達の育成と“本園の保育を考える”をテーマに研修を重ね、教職員一同が建学の精神を堅持し、真の信仰を謙虚に受け入れ保育への思いを益々強くして励んだ。

本園の教育方針は、「キリスト教精神に基づく自由な雰囲気の中で幼児ひとりひとりがいきいきと活動している園」。

子ども、親、保育者が共に育ちあう園として、母の会を共育の場とし、力を注ぎ充実に努めた。

教育内容は自主性、意欲、思いやりの心を育てることを掲げ、人との関わり、共に生きていくための大切な力を育てるため、遊びを通して学び合う保育を目指した。

1983(昭和58)年から3才児保育(1クラス)を始めたが4才児クラスが減ったことにより、1991(平成3)年、3才児保育はうさぎ、りすの2クラスとなった。

○ひかり文庫

絵本と子どもは切り離せない。創立当初は夢の文庫も80冊程の絵本から始まり、着々と充実しひかり文庫の名のように、絵本の部屋は園の大きな特徴となっている。

1982(昭和57)年、園長室・会議室を改造し、ひかり文庫の部屋が立派に完成した。

図書委員になりたい保護者は多く、貸出・返却の業務や絵本の読書会等、楽しい時を持って来た。絵本の講演会も講師を招いて多々開くことや絵本展示会も続けられている。今では2,000冊余りの幼稚園文庫として心を育む幼児たちに親しまれ愛されていて、誇れる活動である。



「どんくまさんのぼん」の読み聞かせ

1991(平成3)年1月31日

○バザー

初めてのバザーは1981(昭和56)年、園が創立5周年を迎えた秋に、記念として卒業生及び関係者を招いて行った。親睦を深めることをねらいとした。久々の楽しい交わりで、又5年後に開こうと約束し、節目の30周年第6回目を今年迎えようとしている。地域の人達からも好評を得ている。

1986(昭和61)年、2回目、この日を待っていた保護者の方々のパワーと協力精神には驚きだった。「手作り焼きたてパンやケーキです。」卒業生から時間差で次々と焼き上がった品々が差し入れられ、行列となった。

お父さんが焼きそばを熱心に焼いたり、開催の度ごとに、園への温かい協力に対し、私達教師は益々励まされた。集まって来た卒園、在園児への思いと、保育への情熱を改めて注ぐことができた。

創立25周年(2000(平成12)年)は、私の入院中に準備が進められ、保護者からも先生からも、「先生のことを覚えて一致団結頑張れました。」の声、声、声。熱いものがこみ上げて来て手術後の痛む体もどこへやら、深く頭を下げ感謝するばかりの忘れられない時となった。



2回目のバザー。手作りパン、クッキー、ケーキが一杯。

1986(昭和61)年11月

○工事〈全面床張替工事など〉

何回にも及ぶ、修理、補修等細かなものから大きな事度々行われたが、1991(平成3)年は、床に穴があいてびっくり！床張替の大工事となった。内藤幸穂理事長就任の年であった。

第二砂場が出来喜んでいたら、園庭の隣りに団地の建設が始まり、陽の当たらない砂場になってしまったことは残念でならなかった。

遊具もダイナミックなもの加わり、幼児の活発な活動が展開された。園庭側の傾斜地が使えないかと市役所に掛け合ったこともあった。

2000(平成12)年7月19日、再び、全面床張替を夏休みに行く事が決定した。当時の肱黒弘三常務理事との立案計画のもと始まったが、親切で丁寧に「幼児には木のぬくもりを」と建材を持って何度か園を訪ねて下さり立派に完成した。大工事の陰には結集した先生たちの働きがあり、荷物の大移動や片付け等々、日夜頑張ったことは思い出深い。美しくなった床を喜び感謝していた矢先、半年後の2001(平成13)年2月2日、配管破損が原因で大水となり園舎半分使用不可、休園にして対処にかかった。その折りも肱黒先生は駆け付けて下さり、病で辛い体をやっと支えて居られた姿は忘れることが出来ない。

むすび

深い緑に包まれた幼稚園は30年を迎えました。愛する子どもたちや先生、保護者の方々の顔がうかびます。共に成長させて下さった神さまに感謝し、これからも愛に包まれた温かい幼稚園を目ざして、幼な子のために喜んで主に仕えていく関東学院野庭幼稚園で在りますようにと祈ります。感謝して。

杉山美智子 (すぎやまみちこ)

1978(昭和53)年4月から関東学院野庭幼稚園に奉職。
 (1977年には、入試、遠足、など手伝う)
 1979(昭和54)年4月から1980(昭和55)年3月まで関東学院野庭幼稚園主任代理。
 1980(昭和55)年4月から1985(昭和60)年3月まで関東学院野庭幼稚園主任。
 1985(昭和60)年4月から2001(平成12)年3月まで関東学院野庭幼稚園主事。
 2001(平成12)年3月、病気のため退職。

野庭幼稚園略年表

- 建物等の名称は当時のまま。
- 記載事項は杉山美智子氏による年表、関東学院百年史、関東学院大学30年史等に拠る。(表中の備考欄に記載)

年月日	ことごと	備考
1974年 (昭和49年)	幼稚園建築のため野庭委員会が発足	関東学院大学30年史
1976年 3月31日 (昭和51年)	献堂・開園式	関東学院百年史
1976年 4月12日 (昭和51年)	入園式、153名が入園する	関東学院百年史
1977年 3月 (昭和52年)	第一回卒業式を行う(卒業生32名)	関東学院百年史
1981年秋 (昭和56年)	創立満5周年記念バザー開催(5年ごとに行うことを決める)	杉山資料
1982年 (昭和57年)	会議室を改造し、「ひかり文庫」専用の部屋ができる	関東学院百年史
1983年 (昭和58年)	3歳児保育を開始(ほし組:12名)	関東学院百年史 杉山資料
1986年* 11月 (昭和59年)	創立10周年記念バザー開催	杉山資料
1990年 (平成2年)	創立15周年記念バザー開催	杉山資料
1991年 (平成3年)	3歳児クラスを2クラスとする(うさぎ組:17名、りす組:18名)	杉山資料
1995年 (平成7年)	創立20周年記念バザー開催	杉山資料
2000年 7月~8月 (平成12年)	園舎工事(床全面張替)	杉山資料、
11月11日	創立25周年記念バザー開催	杉山資料、 関東学院広報
2001年 2月2日 (平成13年)	園舎大水のため、臨時休園	杉山資料
2005年 10月22日 (平成17年)	創立30周年記念バザー開催	関東学院広報

*創立10周年記念バザーは1985年に行うはずであったが都合により翌年の開催となった。

野庭幼稚園長



初代
下平千太郎

1976(昭和51)年4月
}
1977(昭和52)年3月
六浦小学校校長兼務



第2代
下田 哲

1977(昭和52)年4月
}
1981(昭和56)年3月
女子短期大学教授兼務



第3代
白根新治

1981(昭和56)年4月
}
1983(昭和58)年3月
小学校校長兼務



第4代
大島良雄

1983(昭和58)年4月
}
1985(昭和60)年3月
大学教授兼務



第5代
村上 顕

1985(昭和60)年4月
}
2001(平成13)年3月
女子短期大学教授兼務



第6代
所澤保孝

2001(平成13)年4月
}
2005(平成17)年3月
六浦幼稚園長
大学教授兼務



第7代
帆苺 猛

2005(平成17)年4月
}
現在
大学教授兼務

野庭幼稚園主事

氏名	在職期間
佐々木昭子	1976(昭和51)年4月～ 1985(昭和60)年3月
杉山美智子	1985(昭和60)年4月～ 2001(平成13)年3月
岩崎淳子	2001(平成13)年4月～ 2002(平成14)年3月
佐藤美沙子	2002(平成14)年4月～ 2003(平成15)年3月
小高千恵	2003(平成15)年4月～ 現在

資料・情報提供のお願い

学院史資料室は学院に関する資料の収集をしています。各学校、各部署等で発行されました刊行物は一部、学院史資料室にご寄贈くださいますようお願いいたします。また、各所で作成されたのち、既に保存期間を超えたか、不要になっている過去の書類、機器・備品、写真などにつきましても、情報を提供していただけますようご協力をお願いいたします。
(瀬沼・菊池・岡崎)

●中桐寮について

現在、中桐寮の写真を探しております。中桐寮の外観や中の様子が写っているものをお持ちの方がいらっしゃいましたら、学院史資料室までご連絡いただけますようご協力をお願いいたします。(写真は人物等他のものが写っていても構いません。ご提供いただいた写真は後日返却いたします。)

*中桐寮…1953(昭和28)年、中桐久子氏から土地と建物が寄贈された。JR鎌倉駅に近く、種々の集会用に使用されていたが、老朽化が進み、1981(昭和56)年までに逐次解体された。

□J.F.グレセット『愛と祈り』

発行 関東学院 1970(昭和45)年

今では、グレセット先生について知らない人々も多い。本書の「序にかえて」において、グレセットについて、山本太郎氏がこう紹介してくれている。

「先生はその昔、前身校東京学院第五代院長であられたし、また新生関東学院となってからは創立当初からの理事であり、最も忠実な一人の教師として、多くの生徒の心の中に忘れがたい印象を残された人である。」

すでに『関東学院学報 No. 19』に小職は先生のご生涯と業績を紹介しているので、ここでは短く特筆すべきことのみを記しておこう。

先生の天文学は趣味の域を越えていた。立派な天体望遠鏡を学校の屋上に据えつけて、夜遅くまで観測され、生徒たちも参加して教えを受けた。明治学院と関東学院の連合教育の時期には、先生は自然科学を担当されたという。先生は日本を愛され、この国のために生命をも賭することを決意されていた。そのため第二次世界大戦中も、外国人の引き上げ勧告をしりぞけて、ひとり日本にとどまった。英米人を鬼畜のように見做すことを教えこまれていた当時の日本社会にあって、敵国人として生きることは、まことに至難であった。先生は食料不足のために次第に重症の栄養失調に陥っておられた。1945(昭和20)年に戦争が終わって、先生はご子息と再会ができ、急きょアメリカにおいて医療を受けることになった。しかし米軍厚木基地内空港において倒れ、1945(昭和20)年11月20日に天に召された。今年、戦後60年目であると共に、先生の没後60年にあたる。先生の墓は東京多摩の霊園にある。

本書には、1941(昭和16)年12月8日(日米開戦・真珠湾攻撃の日)から1942(昭和17)年9月15日までの先生の日記が掲載されている。訳文は教え子であり、後に英語教師として関東学院中学高校において教えた石原栄義先生である。グレセットは日米開戦の日にかこう祈る。後知恵だが、対戦国同士が、これからは私たちもこのように祈り、紛争解決のために努力できればと願う。



「我等の父よ、私の犯した罪、為すべきことを為さなかった罪を、許したまえ。(中略)今からでも、我々の祖国が、その行為を悔い改めますように、米国民が、戦争の準備を止めますように、彼等が、日本を圧迫した故にどれ程、非難されるべきかを、深く考えますように。おお、神様よ、日本帝国をあやまって取扱ってしまった、という恥ずべき行為の故に、我々を許したまえ。／我らの神よ、戦争の勃発の故に涙している、此処に住むすべての友に、慰めを与えたまえ。神よ、我々ひとりひとりを、助けたまえ。祖国の過失をやめさせる為に、私を何かの道に用いたまえ。」

後半は、「路傍の詠」と題するグレセット夫人の詩集である。ご夫人は1943(昭和18)年に天国に先立っておられる。それゆえ、これは、お二人の『遺稿集』と言える。これを読んで、小職は次の言葉を想起させられた。本書をぜひ読んでいただきたい。

「神の言葉をあなたがたに語った指導者たちのことを、いつも思い起こしなさい。彼らの生活の最後を見て、その信仰にならいなさい。」

(ヘブル書13章7節)

□ 関東学院週報

1931(昭和6)年10月3日、『関東学院週報』の第1号が発行された。

その発行の経緯等について、『関東学院週報』第100号(1934(昭和9)年7月6日発行)に次のように記載されている。

「大関東となつて動もすれば職員生徒の動静が全体に傳達されぬこともあった。学院に生活してゐるものが甚だしく不便を感じだしたのが、週報発刊の機縁であつた。週報がでるやうになってから、眞実に学院一体の感を深くする。

吾等は週報の材料の寡多によって学院生活の澁澁たる生氣あるや否やを知るのである。学院の生活に織込まれて居る各員は、力と、美と眞と善と恵みとを貢ぐべき義務を負ふてゐる。そしてそこに榮ある学院の歴史を創り成して行く責任がある。」

「本誌は学院全般に亘る何らかの通報機関が必要であるとの千葉院長ⁱ⁾の提案によって生まれたものである。この週報が出るまでは高等部、中学部お互に先生方の様子がどうであるか、どんな新しい先生がこられたか、生徒らがどんな活動をして居るか等を知る由もなく、吾々の学院に対する認識は局部的であつて全般の情勢に通ずることが出来なかつた。本週報が出来てその點幾分是正されるに至つたものである。

この週報は学院内の報道機関であると同時に将来これがそのまゝ学院の歴史記録となる事が目標である。その為には学院内の出来事は細大洩さず記載されることを必要とする。これは二三の編輯責任者丈でよくなし得る事でなくその為にはあらゆる人人からニュースを提供されねばならない。」

学院史資料室には『関東学院週報』第1号から第159号ⁱⁱ⁾(第115号は欠)までである。これらは、昨年夏、三春台の高等学校旧館の一室に残されていた資料を整理した際に出てきたものである。

『関東学院週報』が何号まで発行されたのかははっきりしないが、「将来これがそのまゝ学院の歴史記録となる事が目標である。」の言葉のとおり、121年の学院史の一時代を記録した貴重な資料といえる。

i) 千葉勇五郎(1870. 8. 13-1946. 4. 21)…1932(昭和7)年10月から1936(昭和11)年3月まで学院長を務める。
ii) 第159号は1936(昭和11)年4月17日発行。



▲『関東学院週報』第100号



関東学院野庭幼稚園 2004年4月

編集後記

関東学院は、1884年に横浜山手に生まれ、本年10月6日に121周年を迎えました。そして横浜開港150周年、横浜市制120周年の年である2009年には、創立125周年を迎えることとなります。「125年史」編纂の折にも役立つように「学院史資料室ニュース・レター」を編集していますが、今号では関東学院野庭幼稚園を特集しました。現存する学校・園の中で最も新しいこの園であっても、来年は30周年を迎えようとしています。学院各校が激動の時代にどのように学校・園づくりに取り組んできたか、その歴史を顧みることは、将来の学院の歩むべき道への貴重な示唆を与えてくれます。

今後この「ニュース・レター」を通して、学院の歴史資料を後世に遺してゆきたいと願っています。関係各位の一層のご支援とご協力を衷心からお願い申し上げます。

学院史資料室長 瀬沼達也



関東学院 校訓

KANTO GAKUIN Archives

関東学院学院史資料室 ニュース・レター 第7号

発行日 2005(平成17)年10月17日

発行人 関東学院 学院長 松本昌子

編集 関東学院 学院史資料室

〒236-8501 横浜市金沢区六浦東1-50-1

TEL. 045-786-7049 FAX. 045-786-7862

環境に配慮して



古紙配合率100%再生紙を使用しています
2005.10.17.2000